

伸びゆくブラジルの 農業分野における取り組み



工藤 英博 (くどう ひでひろ)
 ブラジル住友商事会社 取締役
 イハラプラス社 経営審議会議長

1. ブラジルの農業

ブラジルは農業大国への道をまい進している。現在の耕地面積は6,200万ヘクタールで、日本の面積の約1.6倍の広さになる。未耕地が多く、原生林には全く手を付けずに、耕地面積をさらに2倍以上に拡大できるといわれている。その広大な土地に加え、ブラジルは、豊富な水資源、肥沃な土質、農業に適した気候という農業大国になる基本的な条件を備えている。近年、それに加えて農業技術が発達し、大規模農業が可能となった。その結果、生産性が大幅に上がり、ブラジルの農業は国際市場で戦うことができるようになってきた。

2002年以降、ブラジルの通貨はドルに対し、右肩上がり、2倍以上強くなっている。その逆風を乗り越えて、図1のとおり、ブラジルの農業関連産業の輸出は増え続けている。

このようなブラジルの農業で、最近大きな動きが起こっている。それは、エネルギー問題に端を発するものだが、異業種の外国資本が参入

してきたことである。

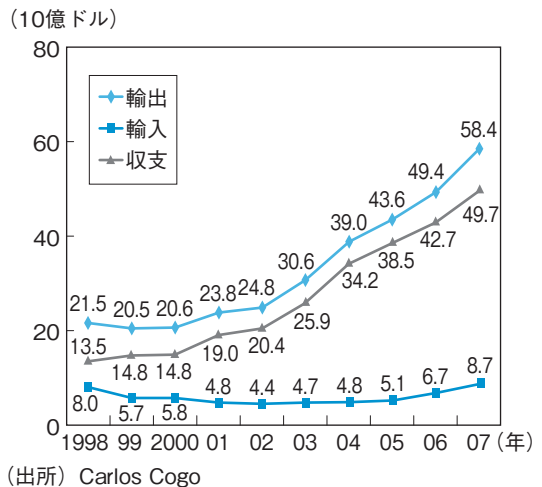
ブラジル製自動車(新車)は、ガソリンとアルコールを自由に切り替えることができるフレックスエンジンになっている。ガソリンスタンドではガソリンだけでなく、自動車用のアルコールも販売している。こういった国情から、国際石油資本が、アルコールの原料となるサトウキビを狙って、農業に参入してきた。

逆の動きも発生した。ブラジルの砂糖、アルコールのメーカーであるコーザンが、今春、エッソのガソリンスタンド網を買収した。アルコールを中心に、ブラジルの農業では巨大な資金が動いている。

2. イハラプラス

イハラプラス社(以下イ社と省略)はサンパウロ州ソロカバにある農薬製造・販売会社である。従業員は現在330人でブラジル各地に150人

図1 ブラジル農業関連産業の貿易収支



あまりの販売・普及員を抱えている。

イ社は、1965年にミツイ・イハラ化学として設立された。住友商事は、長い間日本の農薬をイ社に供給しているが、76年にマイナーシェアを取得している。さらに、2004年に経営への参画を決断し、日本の化学・農薬会社と共にイ社の株式を買い増した。現在、日本の株主企業は、全社でイ社の株式の約80%を抑えている。

日本の農薬会社は、欧米のマルチナショナルに比較して、1社当たりの規模は小さいが、ユニークな技術を保有しており、新農薬の開発力では負けていない。その力を活かし、日本の化学・農薬会社が、イ社に資源を集中してはどうかという試みが始まった。

その結果、イ社は多くの日本の化学・農薬会社から農薬の供給を受けている。イ社は定期的に日本を訪問しているが、7月の訪日チームは13社を訪問した。現在、売上高に占める日本の農薬は80%弱で日本の農薬が販売の核になっている。

イ社では、農薬の数が増えたため、作物ごとの販売や、マーケティングの戦略が組みやすくなり、売上高は大幅に伸びた。資本を買い増した2004年には売上高は100億円を突破した。そして2008年は、200億円を突破する見込みである。結果として、4年間で、日本の農薬の売上高は、2倍以上になる。

いまだこの試みは継続中だが、過去4年間を見るかぎり、一応の成功を取めているのではないだろうか。

3. イハラブラスと日本

イ社ではブラジル人が経営を担い、役員会はポルトガル語で開かれている。日本企業が資本のマジョリティーを抑えてはいるが、イ社は、



綿に関するシンポジウムのイ社のブース

あくまで、ブラジル企業として運営されている。

しかし、役員から従業員まで皆、「日本」を強く意識している。シンポジウムや展覧会では、写真のようなブースを使い、日本の農薬、日本の会社と共に、日本の高い品質をアピールしている。

2008年は、日本人のブラジル移住が始まって100年目に当たり、日本、ブラジル各地で記念事業が開かれている。イ社は、日本を代表する農薬会社という自覚から、100周年の独自行事を計画し、実行している。日系の代理店や農家を地区ごとに招待して、100周年の記念の夕食会を催しているが、非常に好評で、年内いっぱい続ける予定だ。

4. 住友商事の取り組み

住友商事としては、引き続き、農薬ではイ社に資源を投入していく予定だ。人材開発等で可能な限りの経営支援をして、ブラジル企業として一層のレベルアップを図りたいと考えている。とりわけ、イ社はブラジルの農業に関し、豊富な情報を所有している。これらを利用して、ブラジルの農業により一層貢献していきたいと考えている。

